

雑 草 の 語 源

植物民俗研究家 深津 正

「名もない雑草」とよくいうが、これはあくまでも文学的表現であって、実際には名のない雑草というものは存在しない。

ところが、こうした雑草のうちには、その名の由来のわからないものも少なくない。『牧野植物図鑑』などに解説されており、すでに定説化したものもあるが、これまで語源が不明とされたもの、または誤って流布されたものも若干ある。これらのうちの主なものについて、次に私見を述べてみよう。

【アリタソウ】

アリタソウ（アカザ科）の語源について『牧野植物図鑑』をみると、「有田草，多分昔肥前の有田で作られていたので，このように名づけたのではないと思われる」と説明されているが、私の考えでは、有田草は明らかに当字であって、肥前有田云々はまったくの想像に過ぎない。

すでに知られているように、16世紀後半の南蛮貿易は、主に平戸を窓口としてポルトガル船により行なわれていた。おそらく天正年間にわが国へ渡来してアリタソウ（ルウダソウ，南蛮ルウダなどと称し，漢名を土荊芥といい，耆婆草もしくは耆婆三礼草などの別名もあった）はポルトガル船によって持ち込まれたものであろう。ところが，渡来に当たって，臭気の強いこの草が，やはり同様に強い臭気の特徴とするミカン科のヘンルウダと誤られ，これに当たるス

ペイン語の *ruta* によってルウダソウと呼ばれるとともに，これと別にポルトガル語の呼び名 *aruda*（一般にヘンルウダの仲間の名称であるが，とくにこれを *arruda comum* といって区別する場合もあった）によってアルウダソウと呼ばれ，これが転じてアリタソウになったものと私は考えている。

ただし，本当のルウタに当たるヘンルウダは，アリタソウより遥かに遅れて，17世紀にオランダとの交通が始まった後に同国から入ったもので，アリタソウの南蛮ルーダに対して紅毛ルウダと呼ばれた。因みにヘンルウダの名は，オランダ語の *Winruit* から転じたものである。

こうして16世紀末日本に入ったアリタソウは，元来西インド原産の植物であるが，近年帰化植物としてケアリタソウやアメリカアリタソウなどが米大陸から入り，またゴウシュウアリタソウといったものも日本の各地に帰化するなどしたため，本来のアリタソウについてはあまり知る人が少なくなった。

【ヌスビトハギ】

ヌスビトハギ（マメ科）の語源については，『牧野植物図鑑』に，「泥棒が室内に侵入するとき，足音のしないよう，足の裏の外側を使って歩く，その足跡に豆果の形が似ているのでこの名がついた」と説明されており，この説はいろいろな本に引用されているので，信ずる人が多いが，私はこの説は間違っていると思う。

その第一の理由は、ヌスビトとかドロボウの名で呼ばれる植物は、ヌスビトハギに限らず、イノコヅチ、ヤブジラミ、センダングサ、オナモミ、キンミズヒキなどいろいろあるが、これらは例外なくその果実が人の衣服に付着しやすい性質をもっていることである。第二の理由は、盗人と「取り付く」もしくは「付く」という言葉との関連である。『今昔物語』などに、盗人が襲う場合、これを「取り付く」といい、また「盗人がミソカ（密か）ニ付キテ上リケル」といったふうに、盗人がつけ狙うことを「付く」と表現している。

牧野博士の想像されたいわゆる「盗人スタイル」、すなわち頬被りに尻はしより、大風呂敷を背に抜き足差し足といった姿は、かなり治安の良くなった江戸時代以後のもので、それ以前の盗人は決してこんな愛敬のあるものではなかった。密かに物蔭にかくれ、隙をみて矢庭に襲いかかり、殺して奪う、いまいう殺人強盗だった。こうしたやり方を当時の言葉で「取り付く」と形容したものであろう。

だから遠い昔の人は、ヌスビトハギに限らず、人に知らぬ間に果実が身体に取り付く植物と一般にヌスビトとかドロボウの名で呼んだものであろう。

【キツネノマゴ】

キツネノマゴ（キツネノマゴ科）は、路傍にごく普通に見かける雑草である。夏から秋にかけて、茎の先端に淡い紫紅色の小さい唇形花を穂状につけるが、花はあまり美しいとはいえない。

キツネノマゴの語源については、これまで納得のいく説明がなかった。『牧野植物一家言』（1956年）の中に、「其花穂の中から沢山の種子が飛び出すのを、狐の孫が産れてピョンピョン

飛び出したものと見なし、細毛のある花穂を狐の親に擬したものであろう」とある説明も、あまり理にこだわり過ぎて、却って説得力に乏しい。

私はキツネノマゴは「キツネノママコ」の転じたものであると考えている。いうまでもなく、ママコはママコナ（ゴマノハグサ科）のことで、『広辞苑』にも出ているくらい、一般に用いられた名称である。

それではどうしてキツネノマゴの名が生じたのかというと、この草がママコナに似ているが、毛深く、品が悪く卑しい姿をしているところから、このように名付けられたものと思う。こういった例は、キツネノカラシ（イヌガラシ）、キツネノタバコ（ヤブタバコ）、キツネノツバナ（チカラシバ）、キツネヨモギ（イヌヨモギ）、キツネノアヤチャ（ヤマアジサイ）など数多くある。

なおキツネノマゴの漢名は「爵牀」というが、どういうものか、わが国の本草家は、長い間これをイヌコウジュに当てており、本来のキツネノマゴに当てられるようになったのは明治に入ってからである。またカグラソウの別名があるが、これは花穂が神楽に用いる鈴に似ているところからの名であらう。

【トキワハゼ】

トキワハゼは、田のあぜ・畑地・路傍などに普通のゴマノハグサ科の一年草もしくは多年草である。ムラサキサギゴケが走出枝を出して地を這うのに対して、茎が上にのび、花も小さい点が異なる。

さてその語源であるが、トキワハゼのハゼは、はぜ（爆米）の形を連想しての名であると思う。この爆米は、糯米のもみを、水に湿してから、炒って爆ぜさせたもので、昔江戸では元日に戸

毎にこの爆米を作り、その年の吉凶を占ったものであるという。

この爆米は、色が真白で、その形を見て占うくらいだから、その爆ぜた形もさまざまで、なかには片方に大きく口を開いた、サギゴケやトキワハゼの花形そっくりのものもできるわけである。

岩崎薩園の『本草図譜』をみると、サギゴケに「はぜな」、トキワハゼに「あきはぜ」の異名が挙げられている。おそらく、トキワハゼや「あきはぜ」の名は、この花が春から秋にかけて長く咲き続けるところから起こったものである。

いまの人には耳遠い爆米の名も、昔の人々にとっては、はるかに身近な、通りのよい名前であったことは間違いない。

【キカシグサ】

水田など湿地に生え、夏から秋にかけて、対生した葉のわきに小さな淡紅色の花をつける草にキカシグサ（ミソハギ科）というのがある。ちょっと見には可憐な姿であるが、お百姓にとってはあまり喜ばれない草である。

キカシグサの名がいつ頃から始まったかについてはわからないが、水谷豊文の『物品識名拾遺』（1825年）に「キカシグサ、田野ニ多ク生ズ」とあり、少なくとも江戸時代にはこの名があった。

私は、キカシグサは、キサシグサもしくはキカジグサの転じたものではないかと考えている。

『和名抄』に、「木佐佐（キササ）之良美」とあり、『新撰字鏡』には「支加佐（キカサ）志良弥」と記してあるように、シラミの古名をキササ、キカサ、キカザ、キカゼなどといい、現に大和地方の方言にキカジという言葉が残っている。このキカジという方言は、ケジラミや

アタマジラミもしくはその卵のことであるという。

また『本草綱目啓蒙』（1803年）には、「キササはシラミの子なり」とあり、こうしてみると、古くシラミを意味したキササ系統の語は、近世には、とくにシラミの子や卵を意味するようになったと思われる。

私は、キカシグサの葉腋につく花や実の姿を頭髮のつけ根にくっついたシラミの子に見たて、あるいは一見うじ虫に似た種子をその卵に例えたものではないかと考えている。

ケジラミ・アタマジラミ・カラダジラミなど、およそシラミと名のつくものは、終戦直後の混乱期はともかく、現今ではとてもお目にかかることができなくなったが、明治・大正年代までは、農村や貧家の女兒が頭髮にシラミをつけている姿は、日常身近にこれを見かけたものである。従って、キカシグサの花や実のつき方や種子の形などから、シラミの子や卵を思浮かべることは、とくに農村の人々にとっては至極自然の連想だったのである。

【トコロ】

都会地の周辺で見かける雑草としてのトコロには、オニドコロ・ヒメドコロなどがある。江戸時代には、トコロは各地で栽培され、食用に供されたほか、海老に対する野老の言葉の縁起から、橙・串柿・昆布などともに正月の飾り物になくてならぬものになり、野老売りは江戸の歳末風物の一つに数えられた。

『毛吹草』（1638年）には、「武蔵津久美野老」と出ており、江戸どころの名もあるように、武蔵国はその名産地だったらしいいまの所沢も、古い本には野老沢と書かれている。

トコロは、『古事記』に登許呂豆良とあるほか、『和名抄』、『新撰字鏡』にもその名が見

え、かなり古い時代からあった言葉である。

私は、トコロの語は、インドネシア語の *tongkol* に由来するものではないかと思っている。*tongkol* の語は、英語の *lamp* とかドイツ語の *Korren* に相当し、もともと不定形の塊のことで、植物の塊茎にもこの語を用いる。イネ・コメ・モミ・アワのように、インドネシア系の言葉がわが国にかなり伝わっていることと、この地方でトコロと同属の各種の植物が食用に供されている事実からみて、トコロもどうやらインドネシア系の語と解して不自然ではなさそうである。

【オヒシバ、メヒシバ】

路端や畑などに生じ、一たん根を下ろすと、なかなか抜き取りにくいイネ科の雑草である。オヒシバとメヒシバは、姿・形は似ているが属は異なる。『牧野植物図鑑』ではオヒシバに雄日芝の字を当て、「雌に対して大形の草状に基づく呼名で、ヒシバとは、夏の烈しい日にかかわらず盛んに繁茂することによるものであろう」と説明しているが、私はオヒシバの姿がヒエ（稗）、とくにシコクビエに似ているところから、その名が起こったものと考えている。

一般に知られているように、シコクビエはオヒシバを作物化したものであるといわれているくらいだから、似ているのは当たり前である。シコクビエは、陸稲や粟のできないような山腹の畑に作った穀物で、初め四国の山間で栽培されたからこの名があり、弘法大師の徳に結びつけてコウボウビエともいう。

こんなことから、私はヒシバはヒエシバ（稗芝）の転じたものではないかと思う。『物品職名』をみると、オヒシバの名は本来はオヒジハであり、メヒシバはメヒジハであったものらしい。おそらく稗芝がヒエジバと発音され、これ

が詰ってヒジバになり、やがて末尾の音が澄んでヒジハに変わったものであろう。ところが姿の雄々しい *Eleusine* に対してか細く女性的な *Digitaria* があるので、前者にオヒジハ、後者にメヒジハの名がついたものと想像される。これらがオヒシバ、メヒシバと称されるようになったのはごく近年のことである。

【ギョウギシバ】

やはりイネ科の植物にギョウギシバというのがある。わが国をはじめ、広く全世界の暖帯に産し、芝生や牧草として利用されるばかりでなく、昔はこれを民間薬として用い、利尿に効果があったという。米国ではこれを欧州から輸入してパーミューダ・グラスと称したところから、いまではこの名は世界中に通用している。

『牧野植物図鑑』をみると、「行儀芝の意味であるが、草体中どれを目標としてこの名をつけたかわからない」とある。しかし私はギョウギシバは行基芝の意味で、コウボウシバ（弘法芝）に対していわれたものであると思う。いうまでもなく、行基は行基菩薩の名で知られた奈良時代の有名な坊さんで、仏教を広めたばかりでなく、池を掘ったり、道を作ったり、堤防を築いたり、数多くの土木工事を行なって、世の中に貢献し、民衆からあがめられた人である。

コウボウシバが主として海岸に生え、古来砂防に役立ったところから、弘法大師の名に結びつけたのに対し、こちらは、海岸に限らず、内陸にも繁殖して、堤防の土どめとか、砂防にも大へん役立ったところから、あちらが弘法ならばこちらは行基とばかり、その名に因んでギョウギシバと呼ばれたものであろう。

【トボシガラ】

同じくイネ科の植物にトボシガラというのがある。日本中いたるところの山野に見かけるが、

群生している割にはあまり目立たない。

『牧野植物図鑑』では、この植物の語源を、「点火茎の意味で、“から”は茎をいい、とぼすは点火することをいう。即ち茎を燃やすことであるが、何故またこのようにするのか不明である」と説明している。確かに地方によっては、麻幹やタバコの茎を乾燥したものを“とぼしから”と称して燈火に用いたが、植物の名のトボシガラはこれとは関係ない。

私は、トボシガラのトボシは、漢名を和、俗に「とぼし」または赤米と称する稲の一種の唐法師によるものであると考えている。この唐法師と称する稲は、近世に入って南方から渡来し、江戸時代に全国で栽培されたもので、普通の稲に比べて小振りで、全体が弱々しく、『成形成図説』（1804年）にその姿が描かれているが、これをみると、まさにトボシガラにそっくりである。

【チガヤ】

チガヤ（イネ科）は、「つばな」とか「ちばな」ともいわれ、昔から小児の滋養になるというので、子供がこれをしゃぶったものである。

さてチガヤの語源であるが、『日本釈名』（1700年）には、「ちがやとは、血のいろの如く赤きゆへ也」とあり、『和訓栞』には、「千の義、多くあつまりて生ずるといふなるべし」と説明し、『万葉古今動植正名』には、「味甘く、乳汁の如くなる故、ちと名づく」と述べているが、いずれも説得力がない。

ところが、チガヤのチは朝鮮語によるという説がある。例えば、白鳥庫吉博士の『日本の古語と朝鮮語』を読むと、『和名抄』に“茅、一名、白羽草、和名知”とあり（中略）、朝鮮語、tteui と云ふ。国語千と同音なること明けし」とあり、また小倉進平博士の『朝鮮方言の研究』

にも、朝鮮の多くの地方で、チガヤを tui と称するとある。私はこうした朝鮮語説に賛成である。

因みに、つばなを小児がしゃぶる習慣は、日本同様に朝鮮でも、古くから行なわれているという。

【ナズナ】

ナズナ（アブラナ科）は、春の七草の一つとしても知られ、またペンペン草の名でも民衆に親しまれている。

ナズナの語源については、『大言海』に、「撫菜（なでな）ノ義ニテ、愛ヅル意カト云フ」とあり、松岡静雄氏の『日本古語辞典』には、「ナツ（夏）ナ（菜）——春夏の候開花するからこの名を得たのであろう」と説明している。松岡氏の説は、益軒の『日本釈名』に、「夏無（な）也。此草秋生じ春さかへ、夏かるる故」とある説明の換骨奪胎で、いずれも人を納得させるだけの迫力に欠ける。

私は、小倉博士が『朝鮮語方言の研究』の中で、「なづな」の末尾の「な」は国語の菜であるが、「なづ」は朝鮮語の Nazi（薺）と語源を同じくしているという説に賛同したい。この Nazi は現在韓国各地に残っているナズナの方言 nasi とか nasin などの基本語に当たるものだという。朝鮮では、ナズナの若葉を粥に入れて食する風習が古くからあり、わが国の七種粥と通じるところがある。

【カラムシ】

カラムシ（イラクサ科）の語源を、『大言海』は「茎蒸（からむし）の意」といい、松岡氏の『日本古語辞典』には、「茎実麻（カラムス）の転乎」と説明しているが、カラムシは朝鮮語の Mosi から出たことは確かである。しかもカラは韓であって、朝鮮からの渡来という意味を

込めたものであろう。

普通は苧麻の漢字が当てられ、マオと読むことが多いが、これは真麻の意味であろう。『和名抄』に苧に加良無之の仮名を当てているが、苧(ヲ)はアサヤカラムシの総称であるから、必ずしもカラムシだけを指すものではない。

「むしの垂衣」、「むし衾」などの言葉があるように、カラムシを単にムシとも呼んだ。鳥居竜蔵博士は、武蔵の語は、モシシ、つまりカラムシの種子を意味する朝鮮語から出たもので、最初武蔵の一部にカラムシを植えたところ、その地名が武蔵国全体の名となったと述べている。

【イチビ】

最近イチビ(アオイ科)が畑の一隅などに野生化しているのをよく目にする。

古く大陸から渡来したもので、繊維が丈夫で、とくに水に耐えるので、井戸のつるべ縄とか雨衣などを編み、あるいは「はばき」、つまり脚絆を作るなどした。

またイチビの皮を剥いだあとの茎を焼いたものを「ほくち」に使ったもので、この「ほくち」はとくに火保ちがよく、良質だとされ、そのためイチビに「ほくちがら」の名もある。こんな

具合に、火に関係のあるところから、イチビの語源を「打火から転じた」とか、「逸早く火が伝わるから」など、いろいろな説が行なわれているが、私は朝鮮語の Ou-cho-gwi から転じたものではないかと思っている。

【ヒ ユ】

近頃高地や路傍にイヌビユ・アオビユなどの仲間が盛んにはびこっているの、これらに関連のあるヒユの語源について述べてみよう。

『和名抄』には比由の訓と載せ、さらに本草書を引用して、「味甘、寒無シ毒也」とあるところから、新井白石は、『東雑』に「或はその性寒なるによって、此名ありけんも知るべからず、ひゆとは冷とも莫ともいふが故也」と述べているが、これには同意できない。

朝鮮の各地に Pirum, Pirimi, Pinum, Pidzin などヒユの方言が行なわれており、おそらくこれが日本に伝わったものと考えられる。

ヒユを食用、薬用にしたことは、朝鮮も日本も同じで、彼地では普通 Hyong-tchei といわれているが、これなどわが国の方言ヒョウナに相当する言葉で、これからヒユに転じたという見方もできる。

植 調 設 立 の 舞 台 裏

財団法人 日本植物調節剤研究協会常任顧問 戸茹義次

1. 除草剤ブーム

戦時の労力不足や資材欠乏のために荒廃に陥った日本農業を復興し、新技術導入によって生産性を高め、面目一新の農業建設を目指して、戦後間もない頃、農事試験場の前身たる鴻巣試

験地の職員は熱心に討議を重ねていた。その時、誰だったか記憶にないが、除草労働の開放のために雑草研究の重要なのを説いたのは、私の胸に強く応えた。当時は、占領下であって工業復興を最少限度に止め、拡充の許されるのは農業